


## 『わたしが認知症になったとき』を考える



突然の解散、衆院選、そして驚くほどの自民党圧勝。選挙の翌日から、社会保障費関連の削減案が続々、当然のように介護費用も減らされます。与党議員の街頭演説で「介護を大切に政治を」と訴えているのを聞いたのですが、あれは空耳だったのでしょ。うか。

少し時間が経ってしまいましたが、この春印象に残る出会いがありました。4月に国際アルツハイマー会議参加のために京都に出かけたときのことです。京都駅に到着し、お昼を食べようとレストランの前で並んでいたら、バッグにつけたオレンジリング（認知症サポーターの印）を見て「この人も国際会議に参加するのかな」とおつれに話しかけた方がいました。40代ぐらいの素敵な男性で、見覚えがあります。「私も参加します。お目にかかったことがありますか」と話しかけると、「ぼくは忘れる病気なのです」と答えました。若年認知症当事者で活躍中の方でした。（わたしは、テレビや新聞などで拝見していただけ！）。食事をご一緒し、生活上の支援のこと、薬の副作用のことなど、失礼も省みず伺いました。この方は、翌日の開会式で開会の挨拶された丹野智文さんでした。

若年当事者が活躍しているのは、病気の認識をもった上でカミングアウトし、必要なサポートを受けているから。高齢期認知症の人々も同じことではないだろうか。それから、認知症についてお話するとき芯になる部分が変わりました。これまでは、家族や近所の方が認知症になったときどう支えるかという視点でお話ししてきましたが、「あなたが認知症になったら」に変えました。80歳以上まで生きると二人にひとりがかかるといふ病気です。高齢期に入ったら老後の生活設計の中に入れておいたほうが良い。過剰に怖がっているだけだと、いざ認知症になったとき病気を受容することが困難になります。「忘れる病気だから助けてね」と言えるほうが、本人も支え手も楽になります。もちろん支えあえる社会を創る努力があつての上です。

丹野さんを始め、若年当事者の方々が、仕事や子育ての真っ只中にこの病気を得て、苦しみ悩んだ末に、前向きに生きることを選んでいます。その姿勢から学んだことを少しでもお伝えしたいと思います。

困難を抱えて生きている人々みんなと支えあう社会を願う秋。

（代表理事／小島美里）

